

ナチスの収穫感謝祭

—— 精霊・ラジオ・政治 ——

藤原辰史

はじめに——本論の課題

ナチス（国民社会主義者）はドイツ人をどう動員したのか。この問題を「民俗文化 Volkskultur」の層に着目し、考察することが本論の目的である。たとえば、ピーター・バークが『ヨーロッパの民衆文化』（谷泰／中村賢二郎訳、人文書院、邦訳=1988年、原典=1978年）で鮮やかに描いたように、民俗文化というのは、非エリートの文化のことである。それは、祭りであったり、民話であったり、食べものであったりした。きわめて多様で、場合によっては猥雑な様相を呈していた。ナチスを支持したのはエリートだけではなく、むしろ普通の生活者たちであった以上、彼らや彼女らの「文化」に着目することは必須であると考ええる。

ここでは、主に三つの層にしばりたい。民俗文化の道具化、民俗文化のマニュアル化、そして、民俗文化の電波化である。ナチスは、民俗文化という層をきわめて重要なものとして考えていた。しかも、それを温存するのではなく、革新しようと試みていた。そのプロセスを、道具化、マニュアル化、電波化と呼びたい。

参考までに、森明子「ドイツ民俗学と文化人類学」『国立民族学博物館研究報告』(33) (3)、2009年）を参考にしながら、とりわけナチ時代の民俗学についてまとめておきたい。民俗文化を学的に分析する学知の総称が民俗学であり、民俗学こそが民俗文化の発見と維持に重要な役割を果たしているからである。

森によれば、「ドイツ民俗学の中央学会にあたる組織は、1904年に「民俗学協会連合」が、複数の民俗学協会の連合組織として発足した」（405頁）。「ドイツ民俗学が、ゲルマニスティークから分かれて、大学で独立した講座として認められるのは、すでに述べたように、ナチス政権下においてだった。テュービンゲン大学の民俗学が独立した講座になったのは1934年で、1936年にはドイツで最初の大学研究所をもった。当時の所長のもとで、国民社会主義によりそった民俗学を展開し、同じく政権に近い立場をとっていた先史学、人種学に意識的に接近して、ともにナチスのイデオロギーを支え

た」(406頁)。「ドイツ人の本質の特徴を明らかにし、また認識することがその目的とされた」(同上)。

1960年に、ヘルマン・パウジンガーがその『科学技術世界のなかの民俗文化』によって、民俗文化の担い手をfolk Volk から住民 Bevölkerung へ変更すべきであると唱え、田舎の祭りや古い習慣ばかりに目を向けてはいけぬ、と主張した。つまり、ナチ時代の反省のために、ナチスからの訣別を意図していたのである。パウジンガーのテュービンゲン大学の講座名も経験文化学 Empirische Kulturwissenschaft へ変更された。この反省が、果たして本当にナチ時代の反省になっているのか、これも本発表で考えたいことのひとつである。

1. 民俗文化の道具化

まずは、ナチスによる「民俗文化の道具化」の側面をみてみたい。すなわち、帝国収穫感謝祭 Reichserntedankfest の開催である。この国家行事としての収穫祭は、ナチ時代に計5回開催された。場所は、ドイツ北西部の小都市ハーメルン近郊のビュッケベルクという丘、日付は聖ミカエルの日のつぎの日曜日である。この丘の傾斜を利用して、自然の劇場に変えたのは、建築家のアルベルト・シュペアーであった。

一回目は、1933年10月1日。参加者は主催者発表で約50万人であった。「アイントップの日曜日」といって、10月から3月までの第一日曜日に国民全員が質素なアイントップという雑炊料理を食べる(普段の食費より節約された分を貧民援助や母性保護のために募金する)というキャンペーンが開催され、また、「帝国世襲農場法」が施行され、市場から距離をとった農業政策が本格化した記念すべき日である。ヒトラーは、首都ベルリンから各地の農民たちと飛行機で北西ドイツの大都市ハノーファーに向かい、そこから車でハーメルンに向かった。

二回目は、1934年9月30日。参加者は70万人であった。この年から、「帝国農民都市」ゴスラー(美しい木組みの町並みで有名)にも、ビュッケベルクのあとに訪れた。

三回目は、1935年10月6日。参加者は100万人を超えた。すでに、ヴェルサイユ条約の破棄と再軍備を宣言したヒトラーは、この収穫感謝祭で、戦車と戦闘機を使った軍事演習を開催した。この年から、ヒトラーの演説は昼になり、そのあとの軍事演習がクライマックスになる。

四回目は、1936年10月4日。「ヒトラー日和」ではなく、雨だったが、100万人集まったという。

五回目は、1937年10月3日。最後の収穫感謝祭である。軍事演習も一時間に延び、参加者も120万人を超えたという。

この参加者人数はすさまじい人数であった。アメリカのロック・フェスティバルであるウッドストックを思い起こす人もいるだろう。ここではさらに二点ほど指摘しておきたい。一点目は、軍事演習である。ここでは、ビュッケドルフという急造の村を作り、そこに、急降下爆撃機によって空爆させるのだ。第一次世界大戦で、戦闘機が重要な役割を果たしたことから、ナチスは、戦闘機の開発に力をいれる。収穫感謝祭で観客の目を奪った戦闘機が、スペイン内戦でのゲルニカ空爆を担うことになるのである。

二点目は、ヒトラーの「巡幸」である。収穫感謝祭の日は、ベルリンの政府がほほまるごとビュッケベルクにやってくるので、その通る道は飾らなくてはいけない。そこには、主婦たちが動員されるのである。

ヒトラーがドイツの小さな町や村を通ることは、ヒトラーたちにとってみれば、ドイツを一つにまとめあげるといふ政治的意図に結びついていた。たとえば、これは天皇巡幸と似たような効果を街頭の人々にもたらしただろう。ただし、ゲオルク・シュレヴェッケによれば、当時ヒトラーを待つ人々の反応は必ずしも熱狂的ではなかったようである。(Schlewecke, Georg, *Stirb er anständig!: Kindheits- und Jugenderlebnisse mit dem Dritten Reich 1932-1945*, Lutherisches Verlaghaus, Hannover, 1987.) 以下に、引用をみてみよう。

二時間のあいだ、私たちは[……]石の台座のうえにある鉄の柵に寄りかかって待つ。ギュンター（筆者の兄）も、一緒にそこにいる。歩道は人々であふれ、道路の両脇は突撃隊員たちの人垣で遮断されている。

ついに、自動車がカイザーハウスの角を曲がった。——しかし、これは何だ？ 奇妙に静かなままだ。別の車なのか？——

より近くにやってくる。前に制服を着た一人の男が立っている。見たところまるで黄色っぽい人形のように直立不動だ。あちこちで、誰かが幾分嘆きながら叫んだ、「ハイル」——そうして通り過ぎる。

そう、彼がいたのだ！——それは、わたしが前もってイメージしていたものと、全く異なって見えたのだった。[Schlewecke 1987 : 28]

ヒトラーがただの人形にみえたという事実は、つぎのことを示している。ヒトラーの動員のからくりは、ヒトラー本人のカリスマというよりは、そこにたどりつくまでの個人個人のプロセス、待ちくたびれるというプロセス、自分自身の達成感も重要ではないか、ということである。待つ待つ待ち続けることこそが、ヒトラーへの凝

集力を形式的に高め、しかも、その仕組みは上記のような危険を孕んだものだったのではなからうか。もっといえば、ヒトラーは誰でもよかったのではないか。実は、黄色い人形だったとしても第三帝国は成り立っていたのではないか、という妄想さえ頭をよぎるのである。

2. 民俗文化のマニュアル化

ナチスの収穫感謝祭の特徴は、同じ日に、全国各地でも伝統的な収穫感謝祭が開催されていたことだ。ただし、若者は収穫感謝祭を知らない。そこでマニュアルが登場する。このマニュアルは、ナチズムのイデオロギーを浸透させることが目的ではない。地域の特徴を破壊するのでもなく、教会の影響力を殺ぐわけでもない。だが、いくつかナチスらしい仕掛けが潜んでいる。

まず、フリードリヒ・レームの「どのように収穫祭を祝うのか」という論文をみてみよう。これは、『ヴィレ・ウント・ヴェルク』というヒトラー・ユーゲント向けの雑誌に掲載された収穫祭の心構えと方法である（Friedrich Rehm, „Wie feiern wir das Erntefest?“, in: *Wille und Werk*, 25.9.1936.）。ここには、つぎのようなことが書かれてある。

ドイツ農民の日は、個々の農場、村々、あるいはドイツ農民たちだけの行事ではなく、言葉の真の意味において、ドイツ民族総体の祝祭である。この祝祭を通じて、こんにちのドイツ人たちは、つまり、労働者たち、手工業者たち、そして頭脳労働者たちは、ドイツ帝国の食糧供給者たちに日々のパンの確保に対する感謝の意を述べ、その彼らとともにダンスや芝居を楽しみつつ愉快な時間を過ごさずにはいられなかった。それゆえ、ドイツ農民の日は、ドイツ全体で、村でも都市でも、何千にもおよぶ収穫の祝典が開催される。

この見解は、ナチスの公式見解とみてよいだろう。「収穫感謝の日」という祝日になった収穫感謝祭は、国民全体が祝う必要がある。つまり、収穫感謝祭は、単に農村で執り行うお祭りではなく、全国民が祝い、農民に感謝をする国家イベントであること、そして、農業は決して農村だけの問題ではなく、その消費者である都市民の問題でもあることを強調している。農民票を獲得して政権の座についたナチ党は、農民たちに訴えた農本主義を引っ込めることができなかった。このナチ的な（人種的ともいべき）農本主義は、この収穫感謝祭に反映されている。

つぎに、ナチス・ドイツの余暇組織「歓喜力行団」が作成したマニュアルをみてみ

よう。余暇、祝祭の組織化を担う「祝祭の夕べ」局が中心となって作られたマニュアルである。収穫行事ハンドブックの決定版とみてもよい（Amt »Feierabend« der N.S. G. »Kraft durch Freude«, Abt. Volkstum / Brauchtum, in Zusammenarbeit mit der Reichspropagandaleitung, Amt Kultur, der Reichsjugendführung, dem Reichsnährstand und der Arbeitsgemeinschaft für Deutsche Volkskunde (Hg.), Deutsches Erntedankfest, Berlin / Hamburg 1937?.)。ここには、収穫祭の日の午後について、つぎのように書かれてある。

行列が祭りの広場に到着すると、みんなが収穫柱のまわりに集まって、村長と地区農民指導者へ収穫の冠^{エルンテクローネ}が引き渡される。祭りの初めにまず全員で合唱。「大いなる歓喜とともにわれわれは美しき収穫の輪をもたらず」などがよいだろう。そのあと、青年農民指導者〔当時の帝国給養身分団の地方支部の青年リーダー〕あるいは地区の青年監視人〔当時の民間人の監視役や防空の指導者のことを街区監視人と呼んだが、その青年版のこと〕がその収穫の冠を、彼の同志をともなって祭りの広場の真ん中に置く。収穫の冠をめぐる祝典は非常にスムーズに遊戯へと移行する。〔……〕農民の歌である「われらは農民男子なり」を歌い、この祭りを終える。

1. われらは農民男子なり、故郷とかまどに忠実に、原野を拓いて土を耕し、大地に種を撒く。われらは磐石の礎に家を築き、改めて結ばん古来の団結、人と大地の団結を。
2. われらは民族同胞のためにパンを生み出す農夫なり。民族と故国の困窮に永遠なる連携を築く。われらは磐石の礎に家を築く、堂々たる団結、都市と農村の団結のうえに。
3. そして敵が故国に迫りて土を奪わんとせば、われらは故国の兵士に志願し武器とる農民とならん。平安の日々に築きしものをいかなる悪魔もわが拳より奪う力は断じてなし。

ここで重要なのは、午前中にはすでに教会での収穫祭の儀式を済ませていることである。さらに、上記の午後の内容は、基本的に民俗学の知に忠実に再現されたオーソドックスな収穫祭である。収穫の輪、収穫の冠、そして村の広場の真ん中に建てられる収穫柱（木には生命力が宿るといわれている）、どれもが伝統的な収穫祭の道具であり、ナチスはそれらを否定するどころか、積極的に使用するように促している。ナチス色もそれほど濃くない。青年農民指導者はナチスの信奉者である可能性が高く、お

そらく、ここでヒトラーに関する演説をしたかもしれないが、そのほかは従来の収穫祭を真面目に執り行う、というスタンスだ。

ただし、下記の二点については、注視すべきだろう。第一に、「われら農民男子なり」である。この歌詞は、原始的な土と人間の結びつきの讃歌であるとともに、土と結びついた人間がその土のうえに住む故郷を守る戦士でもある、という幾分好戦的な歌でもある。収穫感謝祭というきわめて平和的な祝典が、ビュッケベルクの国家行事でも、あるいは、村々のなかでも、軍国主義的ニュアンスを含んでいることは、等閑視できないだろう。

第二に、実は、このマニュアルは、ある時間になったら、ラジオをつけ、それをみんなで聞くように伝えているのである。「ある時間」というのは、ヒトラーがビュッケベルクで演説を開始する時間にほかならない。つまり、ラジオを通じて、ドイツの村々とヒトラーが接合するのである。マニュアルを執筆したレームはこう述べている。「これらの祝典の中心にはつねに、総統の演説を含めたビュッケベルクの祝典のラジオ中継がある」。

ここに、テクノロジーが民俗文化と密接に結びついていることが分かるだろう。テクノロジーは、必ずしも近代的な振る舞いをするだけではない。反動的であったり、復古的であったりすることでさえ、その効果を倍増することができる。つまり、テクノロジーは相手を選ばないのである。

3. 民俗文化の電教化

ナチスは、ヴァイマル時代から進んでいた安価になり普及を始めていた大量生産型ラジオの販売促進に積極的であった。民衆受信機 Volksempfänger と呼ばれたラジオは、この収穫感謝祭できわめて重要な役割を果たすことになる。つまり、すでに述べた、「総統の演説」と「村の収穫祭」をつなげる役割に他ならない。

収穫感謝祭の当日には、ビュッケベルクの生中継ばかりでなく、合唱やコンサート、さらには、ラジオ劇などの民俗系の番組も組まれる。ここでは、1933年10月1日、ラジオで放送されたハンス・フリードリヒ・ブルンク作品「収穫感謝——メールヒェンのような劇」を分析してみたい。

ブルンクはナチスを代表する作家のひとりであった。戦後、彼はナチスへの協力を否定し、「内なる抵抗」をしていたと弁解したにせよ、1933年から1935年まで、ナチス・ドイツの帝国文化院に所属する組織のひとつ、帝国著作院の総裁であったことは事実であった。つまり、1933年3月から10月にかけて全国70都市で行なわれた焚書の直後に、ドイツの著作活動を統括していたのである。焚書とは、マルクス主義者、自由主

義者、あるいはユダヤ人の書いた書物の全部、または一部を「非ドイツ的精神」の書物として炎のなかに投げ捨てるナチスのキャンペーンであった。帝国著作院の総裁の席に座る一ヶ月前に発表されたブルクの『収穫感謝』は、焚書後において、言葉を用いる表現者がとるべきひとつの態度を示していたといえる。なぜなら、ブルクは、収穫劇という、古くから演じられてきた村の素人劇の形式を借り、民衆の表現の力を、ハイネやマルクスなど、焚書にさらされた教養市民層の「古典」や共産主義者の「聖典」と対決させようとしたとも考えられるからである。

主人公は、若き農民フリードリヒである。彼は、友人とともに、収穫感謝祭の復活をバルト海に面した北部の州メクレンブルクの新しい村で実現しようと準備をしてきた。いよいよ、明日、新しい開拓地に向かうつもりであった。しかし、勉強の成績がよいフリードリヒが農民であろうとすることに、農民である父親は反対する。農業という職業が決して誇りうる、未来に開かれた仕事ではない、というある種の自己否定がその理由であった。父親と息子フリードリヒのこんなやりとりがある。

父「おまえは本当に馬鹿になってしまったのか。絶対にダメだ。勉強しろ、博士〔ガールフレンドの父親〕もおまえを認めているぞ」
フリードリヒ「農民のままでいたいんだ、父さん！」

彼のフィアンセはアルムートという。アルムートの父親は医者であり、息子がそのような人間になることが、フリードリヒの父親にとっての夢であった。ところが、息子は、「農民である」ことが一つの自分の発展であることを父親にぶつけるのだ。収穫祭を行なわない「啓蒙化された」大人たちへの批判がここにみられる。

結局、フリードリヒは、お祭りといっても酒を飲むだけで大地に感謝するような儀式を無視する大人たちに失望し、アルムートとともに村の中心で収穫祭をしようとする。そこで二人は、収穫祭についてつぎのような議論を展開する。

フリードリヒ（身を震わせて）「君の言うとおりで、ここでは全部が愚かで希薄になってしまった。全部が明確になり、全部が説明されている。どれほど収穫があるのか。どれほど儲かるのか。この麦穂にはもうひとつ別の血、つまり大地から生まれた血が流れていることを（彼は激情にかられて穂を握りしめ）、いまや誰も知らない。万事が、もう相場と地代と機械と利子と負債だけだ。これが啓蒙だとみんな言う。実りをもたらした神様に感謝をせず、神様に仕える精霊たちにも感謝をしない。鳥たちにも感謝せず、木々が話題にのぼるのは、

商人が森にいてそのなかからある種類の木を切り倒すときだけ。これがいまの農民さ」(ホレ様が、見知らぬ美しい女性になってそばを通り過ぎながら二人の話に耳を傾けている)。

フリードリヒ(さらにつづけて)「森に収穫の冠があるが、誰も来ない。そこでほくたち二人は種をまき、ほくたちの言葉を大地に伝えたいのだけれど、他人はにやにや笑うだろう。」

アルムート「じゃあ言わせて。一緒に行きましょう！ ねえ、今晚麦おぼさんと一緒に行列を行ないましょうよ。そうすれば麦おぼさんも私たちに感謝してくれる。ただ、古い格言を知ってさえいればね。」

収穫祭をまじめに開催しない大人たちへの憤りが吐露されている。しかも、ここでは、市場経済が批判されているのである。資本主義社会は自然と人間の関わりを破壊し、かつて交流できた精霊たちのことをすっかり忘れさせる、というわけだ。

ところで、彼らの話を聞いているホレ様とは、最も権威のある穀物霊である(ゲルマン神話の万能神ヴォータンの妻フリッカという説もある)。ここで、人間と精霊の交流が生まれる。

なぜ、ここでホレ様が登場するのか。実は、ハンノキ女、水男、森男などの精霊たちがホレ様につきのように陳情していたからである。

女王ホレ様、申し上げます。人間たちが私たちをどう扱っているのか、どうかお聞きください。人間たちは信じません、夢を見ません、感謝をしません、私にキスをしません。それでも、私は無償で人間たちの麦を育ててはいけないのです！——いやむしろ、私はうんざりしているのです。すべての人間にうんざりなのです。私はもう誰も助けません。誰一人として」。そうするとホレ様は、美しい女性に変身して、フリードリヒとアルムートに近づき、収穫祭の行列に必要な新郎新婦になってもらうように、収穫祭で昔使用されていたことわざをささやく。「冠の下の花婿と花嫁／踊るために神のまえへきなさい、／すべてのなかから少しだけ捧げなさい、／たくさんの美しい花々をホレの髪へ、／ミルクを鳥たちへ、パンから塊を、／美しいライ麦女のために麦を、／手いっぱい土を各々の木に、／馬女には一本の手綱を、／リングと洋梨をたくさんの精霊に、／井戸の巨匠には木の実を。／花婿と花嫁よ、神に委ねなさい。／とくに、その若き魂を」

結局、この精霊たちの陳情は、アルムートとフリードリヒというカップルの登場によって成功する。人間と精霊たちが和解したのだ。最後は、ここにアルムートとフリードリヒの父親たちも加わり、大団円を迎える。

ラストシーンはこのようになっている。

お気に召したなら、
拍手をして、仲間に加わって、
整然と、たえず男と女一緒に、
ぼくたちと一緒に歩いて、静かに讃えなさい。

そして、「音楽家たちが行列の前にやってきて」「観客もそれに加わった」あと「もしこの劇が世俗的な祝祭に移行しない場合は、たとえば「さあすべての神に感謝を！」の一番を歌う」ということになっている。つまり、「演じ手」と「受け手」の混淆が描かれているわけだ。

もちろん、この戯曲がラジオで流されたとき、どれほど多くの聴衆者たちが、どういう気持ちで聞いていたのかについては分からない。農村でこの戯曲が実際に演じられたかどうか知ることは、きわめて困難である。

ただ、ナチズムにとって収穫感謝祭がどれほど重要であったのか、そしてどうして重要であったのかについてばかりでなく、ナチスが国民を動員していくにあたって、民俗文化をどれほど重要視していたかも分かるであろう。

おわりに

バウジンガーのような見方だけで、ナチスの民俗文化は批判できない。むしろ、ナチスの民俗文化は、民俗文化と近代化の微妙なバランスのうえにあり、しかも民俗文化はテクノロジーに守られるかたちでさえあった。まさに、復古的な民俗文化を否定し、戦後のポピュラー・カルチャーのなかにバウジンガーが見いだそうとしていた「民俗文化」も、すでにナチスによって把握されようとしていた。こうしたことは、民俗文化の道具化、マニュアル化、電波化という三つの観点からみると、容易に理解できるだろう。しかも、それは「精霊」の物語のようなアニミズムを許容するほどの「おおらかさ」を持ち合わせていた。ここにナチスの動員のからくりを解くひとつの鍵があるのではないだろうか。